

ICTを共通言語に 全員参加の授業改善を

教師全員が
役割分担する研究体制を構築

ICTを活用することで、教師が共通の視点から授業改善に取り組むことができる——。東京都練馬区立中村西小学校（石井盛博校長）では、全教員が参加するICTの研究部会や、指導法の共有化などを通じて、学校全体が一体となったICT教育に取り組んでいる。



◆ICT教育1年生、とにかく使って蓄積を◆

「エルフを抱っこしている僕はどんな気持ちかな」東京都練馬区立中村西小学校（石井盛博校長）1年生の国語の授業。子どもたちが読んでいるのはハンス・ウィルヘルム作の『ずーとずーとだいきだよ』だ。主人公の「僕」が年老いた愛犬エルフを自分の部屋に抱きかかえて行くシーンで、担任の馬場美桃教諭は「僕がエルフを大好きだとわかる文章や絵に線をひいて」と子どもたちに呼びかけながら、実物投影機で教科書の図版を大きく映し出した。

エルフを抱きかかえる「僕」の画像を食い入るように見ながら、子どもたちは教科書の思い思いの箇所に線をひき、読みを深めていった——。

中村西小は平成22年度から2年間、パナソニック教育財団の特別研究指定を受け、ICTの実践研究に取り組んでいる。昨年まで電子黒板が1台だけだ

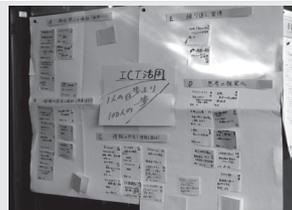


新しいICT機器の使い方を情報部が説明

ったが、助成を受けたことで、実物投影機が全教室に導入された。

「みんなICT教育の1年生、とにかく使ってみて、使い方や授業での活用方法を蓄積していく段階です」という同校研究主任の曾我泉主幹教諭の

言葉通り、中村西小では、今年、教師全員がICTの授業研究を実施。研究を進めるなかで編み出されたICTの活用方法を、付箋紙に書き出し、「①興味・関心の喚起（動機付け）」「②説明の補助（見通しをもつ）」「③情報の共有（理解を深める）」「④思考の視覚化」「⑤繰り返し、習得」の五つの用法に分類・蓄積し、共有を図るなど全員参加で研究に取り組んでいる。「1人の100歩より100人の1歩」が同校の合言葉だ。



ICTの活用法を付箋で整理し、五つに分類

◆全員参加の研究体制で一体感を醸成◆

このほかにも、中村西小では、ICTの実践研究を進める上で、授業班、冊子班、発表班、情報部の四つの部会を設置。全教師が必ずどれかの部会に参加している。授業班は、前述のICT活用法の分類や新しい手法の模索。情報部はICT機器の機能を研究し使い方を他の教員に紹介する。また、冊子班は、研究の成果をまとめて文章化するほか、公開授業の告知などの広報活動を担当。それをもとに発表班が、報告会などで研究の成果を対外的に発表する。

同校の石井校長はこうした取組みについて「ICTという一つの視点を全員で共有することで、教師が一体感をもって授業改善に取り組むことができる」と指摘する。ICTは授業研究において教科と学年を超えた教師の共通言語の役割を果たしているといえそうだ。（編集部）

ICTで「分かる授業」

日常的に電子黒板や実物投影機などのICT機器を使い、分かる授業を追究しているのは東京都練馬区立中村西小学校（石井盛博校長、児童331人）。同校ではICTを効果的に活用して学習内容の共通理解を図り、話し合いの中でさまざまな考えに気付かせながら表現する楽しさを味わう子どもの育成を目指している。

東京・練馬区立中村西小

「私はH先生と同じで、物投影機を使いながら導入でモデリングを行う3人教師たち。3年1組掛かりにしました」

「へえ。僕は2人の無木真由美教諭は、違って洋服で分けました」

「分類」について、実（光村図書3年上）の公



手を使って自分の考えを説明する児童

小学校

堀田 龍也
玉川大学 教授

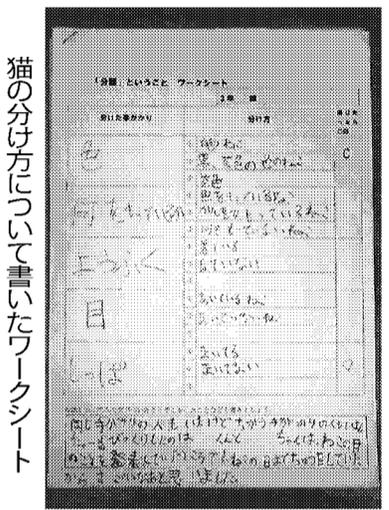


目標達成への影響踏まえた活用を

ICTに慣れることは、教師が黒板でチョークを使うことに慣れるのと同じことである。板書をどのよう

に構成すればよく分かるようになるかは授業の問題でICT活用も授業の質に依存する。ICT活用時に教師は何をすべきか、その学習活動は本時の目標達成にどのよう

実物投影機で「分類」 さまざまな考えに気付き 表現する楽しさを味わう



猫の分け方について書いたワークシート

開研究授業を行った。大切なことを「聞く」の授業では進んで自分の「話す」の授業。例えば、思いや考えを話し、自らの考えと比較しながら話し合うことを目標とした。この単元では「ねこの分類」という活動を切り口に、お互いの考えの相違点や共通点を考えながら話し合うことができるようになることを狙った。前時の授業では教科書に載っている2匹の猫画像のコピーを1匹ずつ切り取り、分類基準を明らかにした上で8つ切りの画用紙に猫画像を張り付けて分類した。本時は「話し合いで大

「○○さんと同じで、猫画像のコピーを1匹ずつ切り取り、分類基準を明らかにした上で8つ切りの画用紙に猫画像を張り付けて分類した。本時は「話し合いで大

この後、教師がランダムに指名した4人がグループになって1人ずつ、実物投影機を使って全体発表した。「一見分けていないように見えませんが」とつぶやいた子は猫のヒゲで分類したことを皆に伝えるため、大きくはっきりと分かるようにズーム機能を使いながら指で示して説明する場面もあった。

実践研究助成特別研究指定チームに指名した4人がグループになって1人ずつ、実物投影機を使って全体発表した。「一見分けていないように見えませんが」とつぶやいた子は猫のヒゲで分類したことを皆に伝えるため、大きくはっきりと分かるようにズーム機能を使いながら指で示して説明する場面もあった。

千葉市立轟町小

「使ってみよう」合言葉に 電子黒板で1分スピーチ



言語活動の充実へ向けての電子黒板の活用

電子黒板を導入した当初、町井教頭は「電子黒板につなぐコンピュータが学校にはなかった」と振り返る。そのため、千葉市教育センターから20台のパソコンを借りて研究に着手。「せっかくなので、まずは全学級で使ってみよう」と全学級で電子黒板を使った

「箱を使って素敵な家を作る」の学習活動では、図画カメラを使って工夫した点や見てほしい部分を大きく映し出しながら説明させた。ノートに記述した図や表、子どもの考えた点や思いを共有でき、電子黒板の画像には必要に応じて書き込むこともできる。メモリースティックにはデータを保存することができ、前時の振り返りにはとても効果的だ。これまでの実践から「書画カメラはノートや資料などの固定できるものには向いているが、動いている場面では使えない」と指摘する。電子黒板の併用を検討している。町井教頭は「電子黒板の活用は、言語活動の活性化につながる」と話す。1年図工

千葉市立轟町小学校を活性化している（佐藤哲校長、児童67人）は昨年1月、電子黒板を活用した教育の調査研究校として全学級に電子黒板を設置した。「とち」を合言葉に、電子黒板の効果的な活用方法について研究。設置から約半年、町井教頭と研究副主任の児童が積極的に電子黒板